

第1回 アジア政経学会優秀論文賞 選考理由

選考委員長・絵所秀紀

(1) 益尾知佐子「鄧小平期中国の対朝鮮半島外交 中国外交『ウェストファリア化』の過程」(掲載誌『アジア研究』第48巻3号 2002年7月)

1978年12月の中共第11期3中全会が中華人民共和国の歴史の転換点となったことは多くの中国研究者の共通の理解となっている。同会議において、現代化建設が国策の中心にすえられ、以後、中国は階級闘争至上主義から離れ、改革・開放への道を邁進していった。外交の転換はそれよりやや遅れ、1980年代に入って、すべての国との友好関係構築をめざす「独立自主」外交が繰り広げられた。

益尾論文はこの1980年代の中国外交の構造的転換を「ウェストファリア化」と呼ぶ。「ウェストファリア化」とは、ある対象国に対して、階級主義政党指導者間の個人的信頼関係に基づいて下されていた外交的決定が、独自の情勢判断と自国の国益への認識に基づいて下されるようになる現象と定義付けている。

その上で、益尾論文は、中国の対北朝鮮外交をケースとして取り上げ、1970年代末からウェストファリア化が始まり、1992年、中韓国交正常化の決定により、ウェストファリア化が完成したとの仮説を立て、その立証を試みている。

選考委員会がこの論文に高い評価を与えたのは、次のような理由による。

まず第一に、中国外交の転換について、「ウェストファリア化」という極めて大胆かつ巨視的な仮説を提示したことである。確かに荒削りな面はあるが、鳥瞰的な視角で、真正面から中国外交を分析しようと試みたことは高く評価でき、中国外交の研究者に知的刺激と論争を引き起こす機会を提供したと言えるだろう。

第二に、結論の部分で、朝鮮半島との関係に関しては、「ウェストファリア化」の段階に達するのは遅く、1992年になってようやく実現したと指摘して、1992年まで韓国との国交樹立を行わなかった要因としては、1)朝鮮半島の安定化を重視していたこと、2)党指導者間の信頼関係に基づく北朝鮮との関係を重視していたことをあげている。しかし、その党際関係重視の外交姿勢は、朝鮮半島に関しても1992年には消えつつあったのである。なぜ中韓国交樹立が1992年なのかという問題についての執筆者の見解は説得的である。

第三に、仮説の立証の過程で、いくつもの新たな知見を提示していることである。この研究テーマに関する内部資料が公開されていない状況下で、執筆者は公開資料の綿密な読み込みに加え、中国で関係者へのインタビューを行っており、それが新たな知見の提示を可能にした、といえよう。たとえば、中韓国交正常化にいたる経過から、中国と朝鮮半島の関係調整を推進したのは、中国指導部内では、李鵬・李先念を中心とする、いわゆる保守派のグループであったこと、1992年4月、訪朝した国家主席の楊尚昆が、韓国との国交樹立を行わないよう要請した金日成に対し、独断で承諾を与えたことなどは、執筆者が初めて学会に明らかにしたことである。

以上のように、本論文は大胆な論文の枠組みを提示するとともに、個別の新たな知見も提示しており、選考委員会としては、アジア政経学会第1回優秀論文賞を授与するのにふさわしい論文である、と判断する。

(石井明)

(2) 陳正達「台湾の石油化学工業の成立過程と産業発展メカニズム－第1ナフサクラッカーの建設を中心に－」(掲載誌『アジア研究』第48巻3号 2002年7月)

陳論文は、台湾の石油化学産業を分析した日本語では初めての本格的な実証研究である。石油化学産業・技術に関する基礎的な知識を踏まえた上で、台湾におけるその発展の特徴を1960年代にまで遡って丁寧にフォローしている。経済開発分野における具体的な産業研究のありかたを示したものとして注目される。今後の東アジア経済研究にとって、大きな貢献をしたものと評価できる。

従来、台湾は輸出志向工業化による発展に成功した代表的事例として、描かれることが多かった。すなわち、比較優位に沿った労働集約的軽工業品の輸出によって牽引された成長モデルである。しかし陳氏は、1960年代初期から輸出志向工業化と並んで、台湾政府が第2次輸入代替工業化(重化学工業化)政策を強力に推進したことを、明らかにした。具体的には、1960年代から70年代初期にわたって計画・実施された第1次ナフサクラッカーとエチレンナフサクラッカーの発展過程の分析である。

台湾の石油化学産業発展に際しては、わが国ではこれまで雁行形態論と複線的成長論が代表的な仮説として提案されてきた。前者の仮説に関して陳氏は、後方関連効果だけを重視するだけでは川上・川下部門の成立過程に関する検討が欠如すると批判している。また後者の仮説に関しては、高く評価しながらも、後方関連効果だけで労働集約的輸出産業と資本集約的中間財産業の同時発展を説明した点に弱点があるとして、工業化の初期環境、戦略産業の育成効果及び川上部門からのプッシュを同時に考慮した複線型工業化仮説を提示している。意欲的な仮説の提示であり、豊かな構想力を示すものである。

プラスチック産業を事例にとり、仮に川下部門に十分な需要がなかったとしても、政府の政策(戦略産業の育成)と企業野需要予測に基づいて、川上部門の産業が成立することを実証的に示した。とりわけ台湾のプラスチック産業が、川上・川中部門の公企業から事業を始め、需要を創出するために、川下部門へと多角化していったという指摘は、興味深い。

利用されているデータや文献も、わが国における従来の台湾経済・産業研究では未使用のものがあり、この点も評価でき

よう。

今後の課題としては、本論文と同程度の確度でもって、外資、中小企業の役割をも視野に入れた台湾産業分析を完成させることである。大いに期待したい。

「受賞の言葉」に代えて：18年後のタネ明かし

益尾知佐子

2003年10月、私は陳正達さんとともに第1回目の優秀論文賞をいただきました。たいへんな名誉で、嬉しかったです。この賞の設立や審査にご尽力いただいた方々に深謝いたします。ただし、当時はまださまざまな手順が未整備で、学会ホームページには長い間、私たちの名前と論文タイトルのみが記されている状態でした。この度、改めて一言書くように申しつかりました。せっかくなので、今の視点から当時の受賞作を振り返ってみたいと思います。

この論文はもともと私の修士論文（00年1月提出）でした。それを何度も書き直し、01-02年の二度目の北京大学留学中に投稿し、再修正しました。当時、私は常に強い経済不安を抱えていましたが、振り返ればこれが自分の黄金時代だったように感じます。というのも、私はこの論文で自分の研究スタイルを探し当てられたからです。

この論文で私は、中国側の視点で1980年代前後の中朝関係の転換を分析しました。99年の初夏、修論では中朝関係について書こう、と突発的にひらめきました。なぜなら、ほとんど誰も書いていないから。5分だけ指導教員の田中明彦先生に相談したところ、「あっそう」で認められました。（いまもし自分の学生がそんな無茶を言い出したら、情報が集まらないので私は絶対にとめます！）

7月、私は体力と無謀さだけ携え、中国に初の調査旅行に出かけました。北京大の院生寮にこっそり泊まり込んで友人たちに助けを乞い、その道の「専門家」っぽい先生に話を聞き、資料らしきものを集めました。そのとき外交学院の友人が、学内でいい先生を見つけたと言ってきました。聞けば中東の石油問題の専門家だそうです。「え、なんで？」「よくわかんないけど、とにかく物知りだって聞いた。」せっかくのアポなので無駄にはすまいと思い、この先生とはかなり長く国際問題を議論しました。最後に言われました。「お前はなかなかおもしろい。私のご近所さんを紹介してやろう。」今だから告白できますが、そうやってお会いしたのが、毛沢東や金日成の通訳を担当した元外交官、陶炳蔚先生でした。この論文の最も重要なインフォーマントです。しかし、当日はいきなり難関が待っていました。陶先生は日本で訪問研究したことがあり、田中先生と「非常に親しかった」ので、お前が本物ならちゃんと紹介状を持ってくるはずだ、というのです。泣きそうになりながら尋問を乗り切り、受け答えする価値のある学生と認めていただいて、ようやく中朝関係のお話を伺うことができました。

このときの世界観の広がりをごどう表現したらよいか、私は今もよくわかりません。陶先生は（たぶん）党員でしたし、規律に反するような話はしませんでした。しかし、内部の人間の物の考え方や解釈、仕事の手順やルールを、駆け出しだった私に実到手取り足取り指導してくれました。電報に「同志」という言葉が入っているかどうかで二国間関係が変わるなんて、当時の私はまったく知りませんでした。聞き取り調査で得た情報を論文に使うことには議論があり、最終的にはほとんど文字で裏付けを取りましたが、陶先生の薫陶がなければ私はきっと、重要な文章の一番の論点を素通りしたままだったでしょう。陶先生に数日、お話を伺った後、私は友人が見つけてくれた韓国の留学生と中朝国境に出かけ、聞き取りもしました。この2週間に出会った多くの方々とは、その後の節目節目で再会しています。あの無謀な日々の経験や気づきはいまや血や肉となり、地域研究者としての私を立体的に形成してくれています。私の後に続く方々にも、ぜひ若気の至りを恥じることなく、学術的な冒険に挑んでいただきたいと強く願います。（2021年6月4日記）

付記：受賞の言葉をウェブサイトに掲載するにあたり、過去を振り返り受賞者に現在のお気持ちを記していただきました（優秀論文賞選定委員会、2021年6月）。